

# 飯盒と水筒

文 石田 忠人

「徐州徐州と 人馬は進む

徐州居よいか 住みよいか」

戦時歌謡「麦と兵隊」の冒頭である。

黙々と行進する兵士の背中に負われた  
背囊には、飯盒が結わえられ、肩に紐が  
けして水筒が腰にある。

かつての日本陸軍兵士の完全軍装した姿である。完全軍装とは、兵士として戦闘に必要な諸式一切を装備する事で、相当の重量があつた。飯盒と水筒は兵士の命を繋ぐために、小銃等武器に次いで必要なものであつた。

戦争形態、軍隊組織が現今と違つて、昔の軍隊は輸送力に乏しかつた。軍隊の移動には足に頼つた行軍が多かつたから、食事は兵士自身が炊飯をせなばならなかつた。その炊飯の為に必要な道具が飯盒であり、水分補給のために水筒であつた。

広辞苑によると「飯盒とはアルミニュウムなどで作った底の深い炊飯兼用の弁当箱。軍隊登山などに用いる」とある。

また、水筒とは「飲料水などを入れて持ち歩けるようにした容器」とある。

幼児の頃、完全軍装をした兵士を見た記憶があるが、飯盒が何處にあつたかは



▲飯盒と水筒



▲背囊を背負った兵隊

知らない。古い映画に「土と兵隊」といふのがある。

これを観てみたら宿营地で

出発の準備をする場面があつた。写真の

飯盒で分るように、飯盒の側面に紐が通せるようになつていて、ここに紐を通して背囊に結わえているのが分つた。

また炊飯の場面では、飯盒の吊り手に棒を通して、何個かの飯盒をまとめて、支柱を設けた焚き火に掛けている所があつた。飯

盒で炊いた飯は、火の回りが良いので美味かつたと軍隊経験のある縁者から聞いた。

日清戦争当時の軍歌に「雪の進軍」というのがある。その一節に

焼かぬ乾物に半煮え飯に  
なまじ生命のあるそのうちは

とあるが、戦闘の激しい中では、美味しい飯も炊く余裕が無かつたであろう。

飯盒は飯を炊くだけではなかつた。戦死した戦友の遺骨を、彼が使つていた飯盒に入れて持ち帰つたと、縁者の一人は悲しい思い出も聞かせてくれた。